

ペンは剣より強いという言葉がある。

それについて異論はない。事実だからだ。あらゆる暴力に、ペンという名の言論は対抗できる。だが、物事には何事もそうだが、例外というものがある。……ああ、まどろっこしい。何でもいい。誰でもいい。誰でもいい。誰か聞いてくれ。前提条件から話す。俺は狂っていない。疲れてもいない。特集記事の原稿が仕上がったんで、二日休みを貰って一日ずっと寝て、それからごみを捨てに外に出た。とにかく、疲れは取れているし精神的にも充実していた。

その上で言う。

ゴミを捨てに行つて、コンテナの中にズタボロの人間が入ってるなんてあんた考えるか？

絶対考えないだろ。少なくとも俺は考えなかった。だから死ぬほどビビったし腰を抜かしかけた。ゴミ袋を放り投げちまって、少し袋が裂けた。とにかく最悪だ。

「お、お前——生きてるか？」

我ながらバカみたいな質問だった。死んでりゃ返事するわけがない。

俺が住んでるこのオールドハイトという街は、東海岸——いや暫ってもいい、アメリカいちやばい街だ。当たり前のように銃弾が頭上を行き交い、世界中の悪党共が睨み合って、警察はそいつらの間を右往左往しながらおこぼれを頂戴してる。

俺が住んでいる東地区はそこそこ治安がいいが、それまでだ。あくまでもオールドハイト基準でしかない。早起きしてジョギング中に死体を発見しても、わざわざ通報しない。ろくな目に遭わないし、もう誰かが何かのついでに通報してるからだ。

死体がコンテナに詰め込まれることだって十分あり得る話だ。それでも驚くときは驚く。新聞記者は、死体ができた後にそのことについて記事を書くのが仕事だからだ。死体にインタビューなんて頼んでもするもんかよ。

「……助けてもらえますか？」

男が細かい掠れた声でそういうものだから、また変な声を出してしまった。死んでると思ったら生きてるなんて、どうしろってんだ。

「おいおい……やめろやめろ、やめてくれ。久々にオフなんだぞ俺は……警察沙汰はゴメンだ」

昨日は満足ゆくまで寝ることができた。今日は掃除だって、簡単だがやったし——買ったままタワーになってるブルーレイディスクに詰まった映画を消化したい。やりたいことが山積みだ。

「もう六時間もゴミ箱に突っ込まれてんですよ……頼みますよ……起き上がれなくて……」

男はゴホゴホと咳をして、血塗れになっている白いタートルネックの胸を苦しそうに上下させた。死ぬんじゃないか。

直感でしかなかったが、俺はそう考えてしまった。だからなんだというのだ。こんなワケがありまくるだろう男を拾ってどうする。どこの組織と揉め事を起こして半殺しにされたチンピラ——かどうかは知らないが、とにかくそんな男を助けたって、なんにもならないだろう。

ああ、ちくしょう。

なんの得にもならないのは分かっていた。しかし、男が生きていてほっとした自分がいたのも確かだ——なによりこのまま放っておけば、ゴミにまみれて死んでいくだけだ。俺はコンテナによじ登り、上から男に向かって手を差し出した。

「手え出せ。引っ張り上げる」

「……助かり、ますよ……」

「ちよっと待て。いいか、俺はただの親切でお前に手を貸すだけだ。後は知らん。今日はオフなん

だ。面倒ごとだけはゴメンだ。とにかく、引っ張り上げたら後は知らんから、自分でなんとかしろ」
「なんでもいいですから……」

男は俺の手を掴んだ。重心を後ろにかけて、男の体をゴミの中から引っ張り上げた。地面に転がって、勢い余って上半身を起こした。

なんかの皮が男の黒髪にくっついていて、男はそれをつまみあげ叩きつけて、そのまま後ろにぶっ倒れた。徹夜明けの自分より濃いクマを作っている。顔は青白くなっていて今にも死にそうだ。

安手の黒いジャケットに血染めの白いタートルネック。黒いジーンズ、安っぽいスニーカー。

コーヒートン本でも持つていけば、休日を楽しもうなんて服装だ。言ってみれば、アジア系の普通の男にしか見えなかった。それが半死半生で、ゴミ箱に突っ込まれている。

「……じゃあ、助けたからな。約束だからな。後は自分で——」

男はピクリとも動かない。返事もしない。俺の脳裏に、よぎってはいけない考えが浮かんだ。まさか、引っ張り上げた瞬間に死んだわけじゃあるまいな。そうなるとマズい。警察に痛くもない腹を探られるかもしれない。俺はとにかく、そういうどうでもいい不安をすぐ増大させてしまう質で——それを解消させるためにすぐ行動に移してしまうのだ。

「お前、死ぬなよこんなところで！」

脇に手を通して、男の体を引きずっていく。エレベーターにプチ込んで、玄関まで男の体を持つ

てくるまでに、他の住人に会わなかったのは奇跡だった。流星にどう言い訳していいか見当もつかない。

男は苦しそうに息をしている。口の周りの血は固まっていて、少なくとも今は新しく血を吐いている様子はない。とはいえ、こっちは素人の新聞記者だ。もしかしたらこの男だって、一刻を争うかもしれない。

「い、医者……！」

「いいですから……！」

「うるせえ！ 人んちで勝手に死ぬな！」

俺は無我夢中で手帳——走り書きにはやはりアナログがちょうどよいのだ——を取り出し、ペー
ジをめくる。確か何ヶ月か前、ネタになるかと思つて闇医者を取材をしたことを思い出したのだ。

「いいか、死ぬなよ！」

男は虚ろな目で床に横たわったまま——何故か笑つた。その笑顔が何を意味するのかは、俺には
分からなかった。

男は右腕や脚の骨にヒビを入れられており、一部の肋骨は折れて肺に刺さる寸前で、危険な状態
だったらしい。闇医者——染みだらけの白衣を羽織つて、ウイスキー瓶を煽りながらやってきた白

髪まじりの小男は、それなりに優秀な医者らしかった。手早く縫合を終え、折れた箇所には適切なギプスで固定し、あつという間に治療は終わった。

「ま、この手の連中は飯を食わせて放っておけば自然に治るよ」

手の消毒を終えて、水滴を拭いながら、とんでもないことを言い出した。前言撤回する。優秀な医者か怪しくなってきた。

「そんな顔するな。俺アマジな話をしとるんだよ。この街で切った張ったをやろうってんなら、それくらいタフでないとな」

「……ま、助かったよ。で、代金なんだが」

「三万ドルでいい」

何を言ったのか、聞き取れたのに意味が分からなかった。かろうじて分かったのは、それが年収の四分の三くらいだということだけだ。

「おいそんな顔するな。こっちはヤバい橋渡っているんだ。これでも初診で多少はまけてる」

俺は名も知らぬ男——今はソファに寝かせ、鎮痛剤で落ち着いたのか寝息を立てている——に恨めしそうな視線を投げかけたが、もちろん返事はなかった。

「今すぐとは言わんよ、ブン屋の兄ちゃん。一月は待ってやる。だが逃げんのはナシだぜ。俺にもそれなりのケツモチがいるし、そいつらにかかれば、カネのないヤツでもむりやり自分でカネを作

らされる。……想像はつくだろう？」

脳みその中身で銀河が渦巻いた。理解が追いつかない。三万ドルの大金をどう工面するか、そもそもなんでそんなことになったのか。

いつの間にか時間は過ぎ、夜になり——テーブルの上に請求額と連絡先、振込先が書かれた請求書だけがひらりと置かれていて、医者のは姿はなくなっていた。休日どころの話ではない。それにあの医者のケツモチは、取材にあたって調べている。

ヴァイトー・キタノ。日系イタリア人にして、コーサ・ノストラの大幹部。もし代金を踏み倒そうなんてことが公になれば、その日のうちに口の中に石を詰め込まれて殺されるだろう。月明かりが差し込んで、テーブルの上の請求書を照らした。

「……なんでそんなに凹んでるんです？」

いつの間にやら、包帯とギプス姿の自分の手足をしげしげと見ながら、男は目を覚ましていた。暗い瞳だった。目の周りにこびりついた隈が、男の絶望の深さを示しているような気がした。俺はゾツとした。これまで、それなりの数の人間と顔を合わせたのが、この男ほど人生に疲れた顔をしている人間はいなかった。

「ああ……お前の治療費で俺の命に危険が及んでんだよ」

「そりゃ、ご迷惑をおかけしましたね」

「あー、大迷惑だよ。流石に人助けして自分が死ぬかもしれないなんて思わないからな」

死にかけていた人間に投げかける言葉ではなかった。俺はすぐにそう思い直し、頭を振った。新聞記者は言葉を操る者だ。ペンは剣より強し。言葉は人を殺せるだけの力を持っている。こいつだって悪気はなかったろうし、何より今回のことは俺の自業自得だ。

「悪い」

男は特に気にした風でもなく、カーテンの隙間から見えるキラキラした街の光と、月明かりを眩しそうに見つめていた。

「謝るのがよく分かりませんが。それに死ぬってまた、大袈裟に言いますねえ」

「お前を治した医者とはな、コーサ・ノストラの息がかかってんだよ。で、三万ドルの治療費をふっかけていきやがった。俺にはそんなカネはない。つまり俺は死ぬ。分かるか？」

男は窓の外をしばらく黙ってみていたが——ベッドそばのサイドテーブルに置いてあった水を飲み干して、ごろりと寝転んだ。表情は窺い知れないが、何か一瞬、ピリツと電流が走ったような重圧が俺を通り抜けたような気がした。

「……僕がなんとかします」

「金持ってるのか」

「持ってないです。実を言うと、仕事中に仕事道具を盗られちゃいましたね。三日何も食べてなく

て……追いかけてる最中に囲まれて、ボコボコですよ」

男は背中を見せて——少し恥ずかしそうに、小さな声で言った。それにしても、なんとかすると
言って、なんとかできる金額だとも思えない。

「なんなんだよお前。投資家とかどっかのCEOとか？」

「殺し屋です」

俺は頭を抱えるしかなかった。よりにもよって、一番関わりたくないタイプの人間だった。俺は
疲労からか脳が理解を拒否し始めたのを察して、天井を見上げた。

「……もう何からツッコめばいいのか分からん」

ぶうん、とスマホが震えた。クラウン・ピザのアプリからの通知。Lサイズ二枚目から五ドルの
クーポン。俺は迷わずそれをタップし、注文した。冷蔵庫からタフ・ビールを二本取り出し、ベッ
ドのサイドテーブルに置いた。自慢の五十インチのテレビをつけて、サブスクストリーミングサイ
トを立ち上げると、栓をテーブルに引っ掛けて抜いた。

「三十分でピザが来る。さっきの医者は飯食えば治るとか言ってたが、マジか？」

「まあ……治るんじゃないですか。肉入ってます？ 血になるほうがいいんで」

男はビールに手を伸ばすことはせずに、テレビを指差した。

「なんのテレビです？」

「サブスクだよ。何でも観れる。知らないのか？」

男は首を傾げると同時に歯を噛み締めた。どうやら痛むようだった。

「いたた……何でも？ 変わったテレビですねぇ」

「変なやつだな。だいたいお前名前なんだ？ 聞いてなかった。俺はサイ」

「サイ。……はあ。僕はドモンです」

「ドモンな。分かった。とにかく明日からなんとかしようぜ。今日はもう知らん」

「明日？」

ドモンは首を傾げたが、痛みを感じたのかまた歯を食いしばった。言葉の意味が理解できないらしかった。

「そりゃ寝れば明日は来ますけど。どういう意味です？」

「どういう意味って——言葉どおりだよ。今日は全部ダメだったろ。俺も散々だよ。だから明日に託すんだ。明日ならなんとかなるかもしれないってな。可能性の問題だ」

ドモンはその意味がよく飲み込めなかつたらしく、なにやら口の中でもごもごしていた。そのうちインターフォンが鳴ってピザ屋が来たので、何を言おうとしたのかは俺には分からなかった。

ドモンはそれから三日ほど家に滞在していたが、四日目の朝に忽然と姿を消した。

あれだけの怪我でよくもまあ動けるものだ、と感心さえしたが、それよりも自分に残された三万ドルの借金の方に意識が向いてしまう。三万ドル。年収の四分の三だ。とてもポンと用意できる金額ではない。銀行が貸してくれるわけもない。ヤミ金にでも手を出すか。それは本末転倒だ。

俺はとにかく考えに考え——ひとつのアイデアに行き着いた。敵を知ることこそ、勝利への近道とも言う。ならば、ヴィトー・キタノに張り付いて、交渉材料でも見つけられたら、この絶望的な戦いを乗り切れるかもしれない。

俺は愛車である銀色のヒュンダイ・アクセントのエンジンに火を入れて、南地区の先——オールドハイト港湾部の一角である、ヴィトー・キタノの根城——キタノ貿易が入っているビルに乗り付けた。時間は夕方に差し掛かっていた。周りは静かで、人の気配もない。

妙だと思った。キタノ貿易は海に面したビルに倉庫、そこに直結している棧橋を高い金網フェンスで囲い、出入口はゲート一つだけだ。彼らが扱う美術品——もしくは真つ黒な違法物品——を守るための措置だろう。だからこそ、どんなに少なくとも警備員の一人や二人くらいはいるはずだ。それが一人もいない。

俺はゆっくりとゲート近くの詰め所に近づく。監視カメラのモニタに、ついたままのパソコン用モニタ。起動されたままのソリティアが『ゲーム・オーバー』の文字を吐き出したまま止まっている。椅子には男が一人座っていて、うなだれるように俯いたままだ。

「おーい？」

声をかけてみたが、すぐに無駄だと分かった。頭から血を流して気絶している。胸は動いているので、生きてはいるようだった。俺はゆっくりと首を詰め所の窓から出して、ビルへと目を向けた。

三階建てのビル。その二階の窓で、光が数度爆ぜ、破裂音が鳴り響く。

何かが起こっている。逃げることもできたが、生憎ジャーナリストとして何が起きているのか確認する義務——本能に近いそれが首をもたげて、俺を突き動かした。事務所の一階は地獄絵図寸前だった。所々でぶん殴られたと思わしき屈強な男どもが、所々でうめいて転がっている。肩から鎖骨にかけて、青く内出血していたり、タンコブを作って泡を吹いたり様々だったが——少なくとも、殺すまではいつていないのは確かだ。

二階に上がると、今度は銃を持った男たちが、手にそれを握りしめたままぶっ倒れている。明らかに異常だ。ヴィトー・キタノは組織の中でもイケイケで通っている武闘派だ。正面切って喧嘩を売ろうなんて輩は、俺のように切羽詰まったヤツか、よほどイカれた人間ということになる。

ぎい、と揺れるドアの先に、その『イカれたヤツ』はいた。不細工のところどころ凹んで、血染めの鉄パイプを持った男——ドモンの背中が垣間見える。

「僕の刀、よくもギッてくれましたねえ。それに僕を殺し損ねるとはね。カネを払うのが惜しくなりましたか？ 入念なくせにツメが甘くて呆れ返りますよ」

「バカ野郎！ テメエ、命無くすぞこの野郎！」

叫びにも近い声で、ヴィトール・キタノが地面に転がって、鼻血を出していた。

「オレを殺ろうってんなら、命賭けてんだろうなこの野郎！」

「賭ける？ 賭けてるのはアンタでしょうが。まあ僕としちゃ、殺す理由が二倍になっただけですがね。僕の恩人が、あんたんとこの闇医者を使って、金払えなくて困ってんですよ」

キタノのデスクの後ろに、戦利品のように積まれていた日本刀を掴み、ドモンはそれをぎらりと引き抜いた。白刃が俺の目の中に禍々しく入ってきて、俺は寒気を覚えた。

「……あんたが死んだら、当然チャラになりますよねえ。病み上がりなんで、こんな鉄パイじゃ殴ってもなかなか人は死にませんが——僕はこいつなら、絶対に人を殺せるんですよ」

キタノの前に立つと、ドモンは刀をまっすぐ上に伸ばして構えた。サムライ・ムービーで見たことがある。名うてのサムライ達——その中でも、首を落とす処刑人が使う必殺の構えだ。その意図はすぐに分かった。キタノの首を落として殺すつもりだ。

俺は思わずドアから飛び出して、ドモンの前に立っていた。

「やめろ！」

「ちよつと……どいてください！ そいつ殺せないじゃないですか！」

「殺さなくていい！ 俺のためにそんなことするな！」

「ですが——」

キタノを振り返ってみると、今までの気の強さは鳴りを潜め、怯えすら感じていた。コーサ・ノストラの大物が、子犬のように震えているのだ。なんなら、股座から湯気だった液体を漏らしてしまっている。

俺は、とっさにその姿をスマホで撮影していた。キタノは俺の意図に気がついたのか、必死に顔を隠した。しかしもう無駄だ。データは手の内にある。

「キタノ、あなたの弱みはもう握った。そんなビビリじゃ、他の連中にナメられるだろ。あなたにやすすぐで悪いが、この写真データを三万ドルで買ってくれ」

「な、何だとこの野郎！ 吹っかけやがって！」

漏らしたばかりでもなんとか取り繕うように、キタノは喚いた。

「それとも申し出を無視して、俺の友達と喧嘩するか？ こいつは本気であんたを殺しにかかっている。三万ドルは現ナマじゃなくていい。あんたんとこの闇医者の利用費と同額なんだ。チャラにしてくれ。それでいい」

キタノは目を泳がせたが、予断を許さない状況に折れたのか、すぐに首を縦に振った。そうだと。ペンは剣より強いのだ。人を殺さずとも、無力化するのには容易い。

「ドモン、お前も刀を納めろ。ノーサイドだ。俺の問題は解決した。殺さなくていい！」

ドモンは構えた刀をどうしたらいいのか分からないようで、しばらくそのままだったが——ようやく下ろして、そのまま白刃を鞘に納めた。

「……持っていてもらえますか」

彼は俺に刀を突き出すと、自由になった両手でそのままキタノの胸ぐらを掴み上げて、鼻がつくのではないかと、というくらい顔を近づけた。

「……僕や彼にちょっかいを出さないでください。彼は僕の恩人です。友人です。そして僕はこの件に関しては全力を出します。言ってる意味、分かるよな？」

手を離すと、キタノはへなへなと腰砕けになってその場にへたり込んだ。もはや脅威は無くなった。そう言わんばかりに、ドモンは刀を持ってその場を去って行った。

追いかけるようにビルを出て、駐車場まで来たところで、ドモンがその場で腹を抑えてうずくまっているのが見えた。俺は思わず声をかけていた。

「大丈夫か！」

白いタートルネックの腹に、少し血が滲んでいるのが見えた。肋骨が折れたときに切開した傷が開いたのだろう。

「……ほっといてくれますか。あんたはカタギの人間。僕は……ただの殺し屋。もう用は……」

「そんなことどうでもいい。とにかく乗れよ。今度はもう少しマシな病院に連れて行く！」

「いや、そうじゃなくて……大した怪我じゃないですし。消毒すりゃ大丈夫ですから」

「いいから乗れよ。どっちにしろ送ってく」

車に乗った途端、俺は相当無茶をしたのだ、ということは今更ながら思い出していた。殺されていてもおかしくなかった。ドモンが言葉でトドメを刺さなければ、後から追って殺されていても不思議じゃない。

生き残ったのだ。俺はとにかくそれが恐ろしくなって、タバコ——ラッキーストライカーを取り出して、啜っていた。

「タバコ、吸うんですか」

そういえば、こいつの前では吸っていなかった。怪我人の前じゃ毒だろうと思っただからだ。

「嫌いか？」

「いえ。一本もらっても？」

俺は無言で一本差し出すと、ライターで火をつけてやった。紫煙が狭い車内で混じり合って、わずかに開けた窓から空に抜けていった。

「——僕のことを友達って、大したお人好しですね」

「お前だってそう言ったろ」

「僕、子供の頃の記憶とかあんななくて。友達できたことないんです」

「……お気の毒って言うべきか？」

「そうかもしれないね」

しばらく、ふたりともタバコを吸っていた。俺は灰を落として、車をゆっくりと発進させた。

「子供の頃——」

遅れて、ドモンも灰を落としてタバコを灰皿にねじ込み、サイドウィンドウを大きく下げた。気持ちのいい海風が、紫煙を洗い流していく。

「子供の頃、毎週金曜日の夜十時になると、一時間だけ、決まったテレビを観てよかったんです。剣を使う殺し屋の話で——それを見るのが楽しみでした」

「テレビね……」

「ええ。僕は……常識つてのをそれで勉強しました。それ以外は殺しの訓練だけやってたんです。嫌になりますよ。得意なことは殺しの技だけなんですから。気づいたら、それ以外は何も残っちゃいなかった」

何も。重い台詞だった。彼の言葉どおりなら、本当に何も与えられなかったのかもしれない。

「最終回の予告で、殺し屋は親友に殺しの仕事がバレるんです。口封じに殺そうと考えるんですけど……結局、僕は結末を知らずじまいで。わざと見せてもらえなかったんです。殺しにはいらな

いって言われましてね。それつきりです。前の日の木曜日は本当に待ちきれなかった。明日が早く来ないかなって……でも、僕には明日が来なかったんです」

ドモンはそう言うと、窓の外へ顔を向けた。

「……君は、明日について話をしてくれましたね。可能性を託すって。今日がダメでも、明日があるって。僕みたいな人間にも、明日はあると思いますか」

「……ある。あるに決まってるんだろ」

俺の声は震えていた。ドモン、お前は俺のために殺しだつて辞さない覚悟だったじゃないか。手袋は褒められないかもしれないが、お前が優しい人間なのは俺が一番よく知っている。

「誰にだって、明日は来る。お前にも必ず来る」

でも、殺し屋は辞めたほうがいいんじゃないか——とは言えなかった。それでもいつかは言わなくちゃならないだろう。俺達は友人同士なんだから。言いにくいことから言わなくちゃならない。なにせ、ペンは剣より強いからだから。